

様式第2号（政務活動実施報告書）

令和8年2月25日

井原市議会議長  
山下 憲 雄 様

井原市議会議員 沖久 教人

下記のとおり政務活動を実施しましたので、報告します。

記

1. 実施期間	令和8年2月14日（土）、2月16日（月）
2. 研修会等の開催地 または視察、要請・ 陳情活動先	早稲田大学スポーツ科学部 埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15  社会福祉法人睦月会 Seamless Support Labs 東京都渋谷区神宮前3-18-33
3. 研修会等の名称 または視察、要請・ 陳情活動内容	子どもの体力向上・部活動の地域移行について  児童発達支援・放課後デイサービスについて
4. 研修会等の講師名 または視察、要請・ 陳情活動先の担当者 名	早稲田大学スポーツ科学学術院教授 深見英一郎  日本福祉大学福祉経営学部教授 社会福祉法人睦月会 理事長 綿祐二
5. 活動内容	別紙のとおり

1. 報告書は、政務活動終了後2週間以内に提出すること。
2. 活動内容欄のスペースが足りない場合は、任意の様式により活動内容を取りまとめ、活動内容欄へは、「別添のとおり」と記載すること。



## 1. 視察の目的

本視察は、早稲田大学スポーツ科学学術院 深見英一郎教授との意見交換を通じ、部活動の地域移行が抱える本質的課題、子どもの体力向上の方向性、スポーツの魅力向上を支えるコーチング論の展開、さらには海外におけるスポーツ文化および指導者養成の在り方について知見を深め、本市の教育・スポーツ政策へ具体的に反映させることを目的として実施した。

## 2. 部活動の地域移行について

部活動の地域移行は、単なる学校から地域への業務移管ではない。深見教授との対話を通じて強く共有されたのは、「制度設計よりもまずコーチングの質を再定義しなければ、本質的な改革にはならない」という視点である。日本の部活動は長年、勝利至上主義や指導者の経験則への依存、精神論的アプローチに支えられてきた側面がある。地域移行は、競技スポーツと生涯スポーツを整理し、それぞれの目的に応じて再設計する好機である。そのためには、指導者の再教育、資格制度の高度化、科学的知見に基づく評価体系の導入が不可欠であり、行政も主体的に関与すべき領域である。

## 3. 子どもの体力向上について

現在、子どもたちの体力が著しく低下しているというよりも、「経験しない動きが増えている」ことが課題である。投げる、ぶら下がる、跳ぶ、ひねる、バランスを取るといった基礎的運動経験の減少は、神経系の発達機会の不足につながる。体力向上とは単なる数値改善ではなく、幼少期から多様な運動経験を積み重ね、生涯にわたり身体を動かす基盤を育むことである。競技特化ではなく、運動文化の裾野を広げる設計が求められる。

## 4. 海外のコーチング論と日本の課題

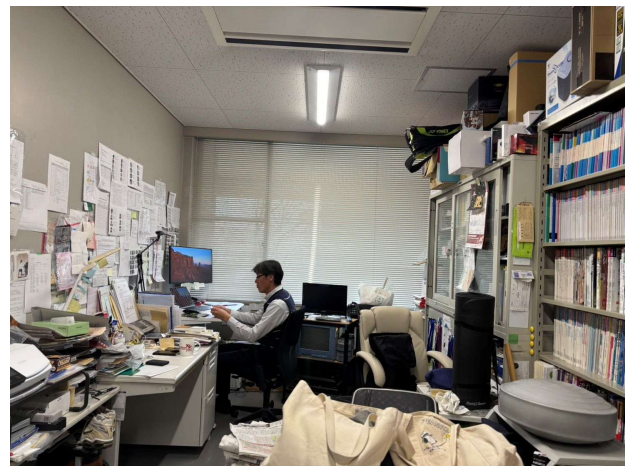
海外では、長期育成モデル (LTAD)、アスリート中心型コーチング、ポジティブコーチングなどが体系化され、研究成果が現場へ還元されている。一方、日本では依然として経験則に依存する場面があり、科学的検証や研究成果の社会実装は十分とは言えない。今後は、研究と現場を結ぶ政策設計を進め、国際水準に立脚したコーチング理論を構築する必要がある。そのためには、大学と自治体、研究と行政が連携し、実証と実践を往還させる仕組みづくりが重要である。

## 5. 所感

今回の訪問を通じ、私は自らの体育教師時代を振り返った。勝たせることに価値を置き、結果を求め、厳しさを指導の本質と信じていた時代。その延長線上に現在の部活動文化があることを否定できない。しかし時代は確実に変化している。少子化、価値観の多様化、地域コミュニティの変容の中で、部活動の地域移行は単なる行政改革ではなく、日本のスポーツ文化を再設計する歴史的転換点である。

体力向上とは数値の向上ではなく、生涯にわたり身体を動かす喜びを持ち続けることである。勝利至上主義から関わり続けられるスポーツ文化へ転換するためには、制度ではなく指導者の思想とコーチングの質が問われる。地方自治体だからこそ、学校施設の有効活用、世代循環型クラブの設計、障がいの有無を超えたインクルーシブな運動環境、指導者研修の体系化を実装できる可能性がある。スポーツは教育であり、福祉であり、地域経済をも動かす文化装置である。井原市が小さいからこそ、実証的モデルを構築する責任があると強く感じた。

### 視察写真





## 1. 視察の目的

本視察は、渋谷区神宮前に整備された重症心身障がい児者を対象とする次世代型複合福祉施設「シームレスサポートラボ原宿（指定管理：社会福祉法人睦月会）」の運営方針および支援体制を学び、医療的ケア児者の地域生活支援、児童期から成人期までの一貫支援、福祉と ICT の融合、地域共生型施設モデルについて、本市施策へ活かすことを目的として実施した。

## 2. 施設概要

### (1) 運営主体

社会福祉法人睦月会。重度の障がいであっても地域の中で当たり前の生活を描くことを理念とし、利用者利益優先・人間としての尊重・地域との協働を基本方針としている。

### (2) 施設構成

5階建ての複合型施設であり、1階に地域交流カフェ、2階に園庭、3階に活動室、4階に医療的ケア対応プール、5階に遊戯室を配置。地域に開かれた都市型福祉拠点として設計されている。

## 3. 事業内容の特徴

### ① 児童分野（1歳～18歳）

居宅訪問型児童発達支援、児童発達支援、放課後等デイサービスを実施。PT・OT・ST・看護師が連携し、プール療育、スヌーズレン、デジリハ、摂食訓練など専門的支援を日常的に提供している。

### ② 成人分野（18歳以上）

生活介護および自立訓練（機能訓練）を実施。「はたらく×たのしむ」をコンセプトに、カフェ業務、創作活動、音楽療法、プール、機能訓練等を組み合わせ、社会参加と役割づくりを支援している。

## 4. 医療的ケア体制

経管栄養、吸引、酸素管理、導尿、呼吸管理等に対応。主治医・嘱託医・法人・保護者が段階的に合意形成を行う制度設計が明確化されており、安全性と透明性を担保している。

## 5. 施設配置図・視察写真

別紙参照

## 6. 所感

今回の視察を通じ、私は改めて「福祉とは守るものではなく、人生を設計する営みである」という確信を深めた。睦月会が掲げる「既存福祉からの脱却」とは、制度改善の範囲にとどまるものではない。それは、障がいの有無を超え、一人の人間として尊厳ある人生を最後まで描くという哲学であり、その哲学を建物、組織、人材、事業設計にまで落とし込んだ実践であった。

綿教授が語られた「脱福祉」「脱いい子」「脱福祉的平等」という言葉は、本質を突くものである。「脱福祉」とは、支援される側という固定的な存在をつくらないこと。「脱いい子」とは、周囲に合わせ、我慢し、迷惑をかけない存在に押し込めないこと。「脱福祉的平等」とは、同じに扱うことが平等ではないと知ることである。本当の平等とは、その人に合った支援を徹底的に設計すること。制度に人を当てはめるのではなく、人に制度を合わせ直すことである。さらに私は、もう一つの言葉が心に残った。「たかが福祉の仕事、されど福祉の仕事」福祉は華やかな分野ではない。しかし、人の人生の最終章を支える営みである。そこには政治や経済を超える重みがある。睦月会の実践の核心は、「関係性は専門性を凌駕する」という一点に集約されると感じた。高度な医療や制度設計があっても、最後に人を支えるのは「この地域で生きたい」という関係の力である。

生まれ育った地域で生まれ育ち、余命が何年であっても、重度の障害を負っていても、その地で死ぬることの豊かさ。地方において、それは決して当たり前ではない。しかし本来、最も豊かな社会の姿ではないだろうか。また、「8050 問題からの脱却」という明確な理念は、家族だけに責任を負わせない社会構造の構築を意味している。これはまさに、今後の地方自治体が担うべき責任であると強く感じた。

本施設は「医療×福祉×教育×地域×ICT」を統合した先進モデルであり、重度であることを理由に活動を制限しないという理念が徹底されていた。医療的ケアがあるからできないのではなく、「どうすればできるか」を制度として設計している点に、深い感銘を受けた。私は問い直したい。「お金儲けをしなければ施設は運営できないのか。」確かに経営は必要である。しかし理念なき経営は持続しない。志ある経営こそが制度を動かし、地域を動かす。

国の制度は今後も変わり続けるだろう。しかし、制度が変わるのを待つのではない。制度を変えていける井原市でありたい。厚生文教委員会委員長として、本市における福祉政策を「給付行政」から「人生のトータルコーディネート政策」へと再構築する必要性を強く感じている。具体的には、

- ・ 医療的ケア児（者）の受け皿整備
- ・ 福祉と教育の連携強化
- ・ ICT 活用型療育の導入

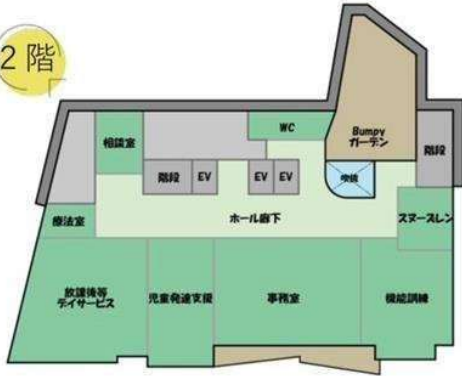
- ・小規模多機能型拠点の検討
- ・地域交流機能の併設

これらを井原市規模に適した高品質モデルとして段階的に構築すべきである。小規模自治体だからこそ可能な、顔の見える切れ目ない支援体制。多様性の中で、生まれた地で最期まで生きられる社会。それは単なる福祉政策ではない。福祉に限界はない。限界をつくるのは私たちの発想である。重度の障害を負っても、生きがいを持って働ける場所をつくること。多様性の中で、生まれた地で死んでいける喜びを守ること。睦月会の実践を地方バージョンとして昇華させ、井原モデルとして確立する。その挑戦を、厚生文教委員会の責務として前に進めていく決意である。

# 施設配置図



2階



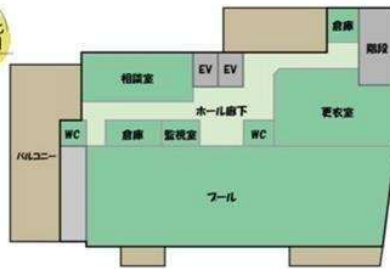
1階



5階



4階



3階



## シームレスサポートラボ原宿 視察写真



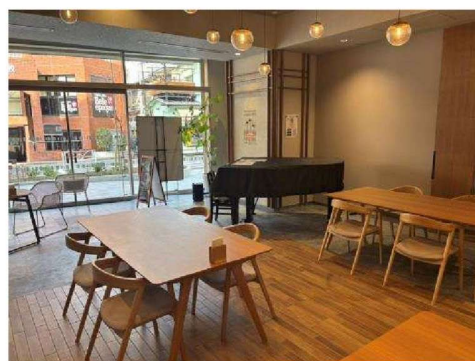
外観：施設正面



外観：別角度



1階：カフェ就労支援



1階：カフェ全景



1階：カフェ内観①



1階：カフェ内観②



2階：園庭①



2階：園庭②



2階：児童発達支援



2階：放課後デイ



2階：活動室①



2階：活動室②



2階：スタッフステーション



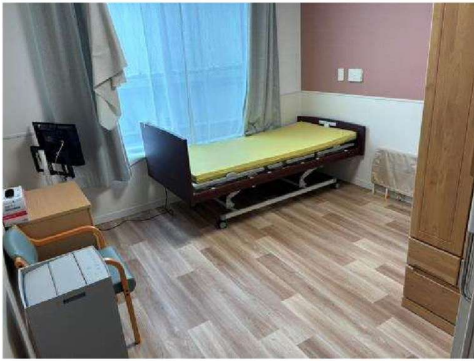
2階：機能訓練室



2階：スノーズレン室



3階：生活介護フロア



3階：宿泊室



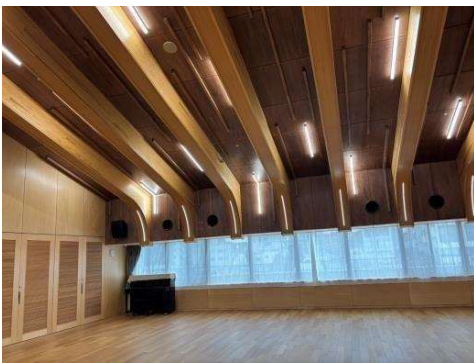
4階：プール



4 階：機械入浴



4 階：個別浴室



5 階：遊戯室



5 階：遊戯室